

## 私の愛したお医者さん

上坂明美

## 三日間しか生きられなかった命

今、私は癌と戦っている。私は所謂「帰国女子」、日本に帰って来ても、日本の社会に馴染めず引きこもった。それが去年の九月、癌の宣告を受け、真っ先に思い浮かんだのが、豪州メルボルンで出会ったお医者さん、ハリリーのこゝろだった。そして彼に書いた一通の手紙が思いも寄らない奇跡を生み出した。

ハリリーは異文化間の摩擦の研究を専門とする精神科のお医者さんであり、その分野では第一人者、普通だったら「雲の上の人」。でも、私にとっては、誰よりも「かけがえのない宝物」。彼がいるから今の私がある。どんなに辛くても前を向いて生きて行ける。

私がハリリーと出会ったのは、もう三十年前のこと。あの頃、日本では精神科病棟の鉄格子の中で患者を管理するのが一般的で、精神科に行くこと自体が「気が狂った人」のようにレッテルを貼られた時代だった。今のように「うつ病」の治療も積極的に行われていなかった。だから最初、ハリリーに会いに行くのが怖かった。でも、あの時、ハリリーに出会わなかったら、多分、私は死んでいたと思う。

本当に言いたかったのは、自殺するのを三日間先延ばしにすることではなく、その三日間の中で最大限にできる「可能性」を探り出して欲しいということだった。それは今でも同じ。どんなに、癌になって絶望的な状態に追い込まれたとしても、「生きている限り希望はある。だから絶対に諦めるな!」と、彼は言い続ける。

三十年前、私が自殺を思い止まったのも、ハリリーの言葉だった。

「たとえ死んでも、死んでからその先、苦しまないという保証はない。死んでから後のことは誰にも分からない。もしかしらたら今以上に苦しむかもしれない。だから逃げないで! 今ある現実から目を背けないで欲しい。逃げれば逃げ程、問題は大きくなって来る」

それで私は思った。「生きるも死ぬも地獄なら、この人の言う通り、三日間だけ生きてみよう」と。その三日間が、今日まで三十年間生きることとなった。

私に取って大変だったのは、大学の授業や生活を維持するためのアルバイトの忙しさだけでなかった。ハリリーと向き合う時間こそが苦勞の連続だった。日本と豪州の文化・考え方の違いは、まるで磁石の両極のように反発し合った。それでどうしたか? ハリリーの専門分野から、日本人にとって「素直」の大切さや「あるがまま」に生きる意味は理解されていた。でも、日本のように共存とか寄り添う生

ハリリーとの出会いは、まさに運命の出会いだった。両親に勘当されても、会計士になるという夢の実現に挑戦したくて、豪州の大学に入学したけれど、途中で、お金がなくなってしまう。それで、大学のカウンセラーが見つけたしてくれたのがハリリーだった。1千人以上いる同じ学部の中で、たった一人の日本人学生のために、ハリリーの専門分野は最適だと思われた。

ハリリーの粘り強さ・絶対にあきらめない心は、凄かった。一番びっくりしたのは、やはり、最初に彼に出会った日だと思ふ。

あの日、私は言った。「私、もうポケットに50ドルしか持っていない。お金もないし、家族も友達もない。ビザがなければ豪州にいられないけど、両親は死んでも日本に帰って来るなど言っている。だから、もう死ぬしかない!」

そんな私に、ハリリーは言った。「50ドルあったら、あと三日間は生きられるよね。もし本当に死にたかったら、三日間生きてから死んだらどう?」って。

「この三日間しか生きる可能性がなかった命」(ハリリーが

活ではなく、「自立」を重んじる国なので、私の「甘え」は、悉く拒絶された。だから、彼に「日本人とは何か」を理解して貰い、彼と二人三脚で、異文化の壁を乗り越えて、お互いを理解し合う努力をするしか方法はなかった。

今、私の家には、その時にハリリーに宛てて書いた5000枚以上の手紙・日記が存在する。書いた方も大変だったけれど、それを全部読んだハリリーだって大変な時間と労力が費やされた。

それである時、私はハリリーに尋ねた。「何故、こんなにも私のことを一生懸命に助けてくれようとするの?」と。ハリリーは、家族との時間も犠牲にして働くほど超多忙だった。でも、私のために週に二〜三回時間を割いてくれた。

ハリリーの答え。「僕が君を助けたいのには、君に愛情を感じるからだ。君は、他人を思いやる心がある。だから、今僕が君を助ければ、きっと、君は他の多くの人を助けるはずだ」「君は僕に贈り物をくれている。君が僕に会いに来てくれること自体が、僕に取ってのギフトなんだよ」と。

そんな彼と過ごした三年間は、それまでどんな風に生きて来たのか、自分を見つめ直す良い機会となった。そして無事、大学を卒業、ハリリーが身元引受人となってくれて永住権も取得、会計士事務所就職、私の夢は実現した。

でも、私の人生は、いつも波乱万丈。そこで「めでたし、めでたし」とはならなかった。就職してから間もなく、大

きな交通事故を起こして、会社に何ヶ月も行けなくなりました。それが原因で上司との関係が悪化、パワハラで不当解雇された。その後、結婚の話もあったけれど、結婚式寸前に婚約者が事件を起こして取り止めになった。

その時助けてくれたのは、やっぱりハリーだった。彼は言った。

「あの三日間しか生きられないと思った時のことを思い出してごらん。そして、あの三年間に書き貯めた日記を本として出版できるように書いてごらん。そうすれば、きっと、どんなに辛くても何かが見えて来るはず。僕は君を信じると。」

ハリーが言うように、やっているうちに違うものが見えてきた。私が書いてきた日記は彼に對してと言うよりも、自分に対して書いたものだった。ハリーと衝突すればするほど、「日本人って何なのか？」が、はつきりと見えてきた。そして、日本の社会が嫌で、外国に飛び出してしまった私だったけれど、「日本に帰ろう！」と思えた。高齢の両親の介護のことも心配に思えた。

もうハリーには、二十年以上、会っていない。それは医者と患者の間柄ではごく普通のこと、特に日本では医師が患者と友達になることは、倫理上、考えられない。でも、ハリーの人柄は違っていた。

ハリーの所に通い始めてちょうど二年目の時、私は最愛

「他人を無条件に愛する心の広さ」だと思ふ。出会って三十年間、私の我が儘で、彼を怒らせたり傷つけたりしてしまうこともあった。でも、ハリーは私を責めなかった。「気にしなくていいから。僕は君の大きなクオリティを知っているから大丈夫だ」と。

ハリーは、いつも「生きていくことの意味」を私に突きつけた。どんなに後悔しても過去を覆すことは出来ない。どんなに憂いても心配しても、将来何が起きるのか誰にも分からない。だからこそ、「今、精一杯生きる」。愛する人がいるのなら、その人を全力で愛そう。困っている人がいるのなら、その人に出来るだけ手を差し伸べてあげよう。人生は奇跡の連続。生きていく限り、チャンスはある。やり直すことも出来る。人生は山登りと同じ。登っている間は苦しいけど、頂上には素晴らしい景色が待っている。それを信じて諦めず歩き続けよう。

これが「私が愛したお医者さん、ハリー」。この世の中で、北極星のようにキラキラと輝き、私に行くべき道を照らしてくれる唯一無二の存在、心から尊敬している人。彼のおかげで、今までどんな苦難も乗り越えて来た。どんなに失敗しても大きく受け止めてくれる愛情のもと、いろんなことに挑戦してきた。

多分、彼がいなかったら、今の癌の病気も半ば諦めたかもしれない。癌は、肉体的な苦痛よりも、精神的な苦痛に

の友達を急に亡くしてしまった。それも米国で、だから豪州にいた私にはどうすることもできなかった。その計報を受けた日、ちょうどハリーに会いに行くことになっていた。そして、その日のカウンセリングが終って、私が帰ろうと席を立った時、ハリーは思いもかけない行動を取った。

「明美、こっちに来て！」

そう言うと、彼は黙って私を抱きしめた。優しくかった。それは、どんな慰めの言葉よりも、私の悲痛な思いを和らげた。

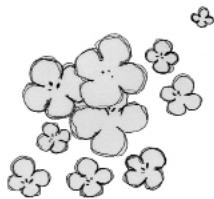
そしてその頃から、ハリーは言い始めた。「もう僕のこと、お医者さんと呼ばないで。僕の名前、ハリーと呼んで。僕は君の友達になりたいんだ」と。

そんな彼だったから、どんなに会っていないなくても彼の誕生日には連絡した。でも、超多忙なハリーからメールが届くことはほとんどなかった。私も「過去の人」になったのだと諦めていた。それが、癌の宣告を受けて、「今までの人生ありがとう！」とハリーに書いて出したメールが、私の人生をひっくり返した。

何よりも驚いたのは、彼の返信メールのストレートな愛情表現だった。彼が書いてきた文章の言葉使いに、びっくりした。ハリーと接触していなかった二十年以上の日々がどこかに吹っ飛んで行った。彼からは、人生で大切なことを教えてもらった。その中でも一番大きく私を変えたのは

耐えられるかどうか勝負の分かれ目。これは今までにない大きな挑戦となった。でも、私のそばには、どんなに目に見えなくても、ハリーがいてくれる。彼が諦めない限り、私も諦めない。

豪州で「ブルー・スカイ(澄み切った青空)」「真実の愛」を意味する。今年のパレンティン・デーに、私はハリーに「真つ赤なバラ」を送った。とにかく、彼を悲しませることがないように、癌を克服できるように、生きようと思う。



うえさか あけみ

#### 上坂明美

1960年、北海道函館市生まれ。函館の高校を卒業後、獨協大学、英語科を卒業。その後、外資系、大手会計事務所の役員秘書となる。1989年、自らが会計士になる事を目指して、豪州のスインバーン大学のビジネス学科、会計士コースに留学。4年後、無事卒業し、世界的規模の会計士事務所に採用されるも、大きな交通事故により、職場復帰困難となる。その後は、豪州と日本で、複数の民間企業の経理を監督する職を勤める。現在は、函館にて、高齢で身体障害者の両親を介護しながら、自分の乳癌を克服するべく療養に専念する。英語と日本語の両方、正規に指導する資格と経験を保有する。